

うし の まつ 牛 ノ 松 遺 跡

調査の経過

幡豆山地の頂部をなす茶白山（標高290m）から北に伸びる低丘陵は、額田郡幸田町大字須美地内で緩やかな勾配をなして台地へと続き、さらに須美川に至る。牛ノ松遺跡はこの台地上に立地する遺跡で、地籍は大字須美字牛ノ松である。

今回の調査は、一般国道23号岡崎バイパス建設に伴う事前調査として、建設省中部地方建設局名四国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、13000㎡を平成4年4月～平成5年3月にかけて実施した。

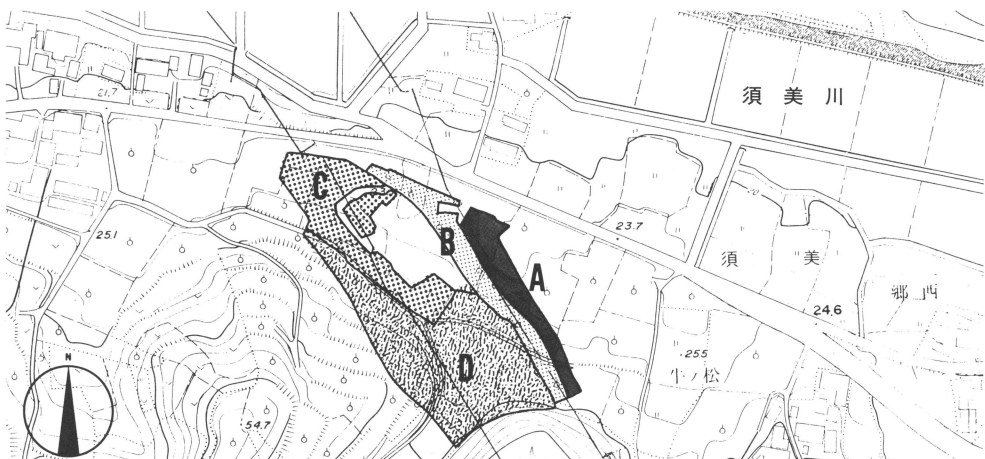
調査の概要

調査にあたっては、広い面積に加えて、工事用土砂運搬道路や沈砂池の存在、工事日程等も考慮し、調査区を第1図の如く四小区に分け、B・A・D・C区の順で調査した。

調査結果（D区を除く）を素描すれば、遺跡の時期は大別して旧石器～縄文と鎌倉～室町期に分けることができる。前者の遺構は確認できなかったが、遺物としてはA B区を南北に貫く谷地形の下層より、黒曜石・頁岩製のポイント・スクレイパー・石鏃などが出土した。付近からの流れ込みと考えられる。

中世の遺構としては、谷地形をはさんで東西にそれぞれ方形に巡る溝や柱穴、土坑、土壇墓などを検出し、屋敷地が想定される。出土遺物としては、灰釉系陶器や常滑産の甕、土師器皿・青磁・宋三彩などの輸入陶磁片などがある。当時この地は伊勢神宮領であったと考えられ、それとの関係も踏まえる必要がある。

（大橋正明）



第1図 調査区位置図



第2図 遺跡全体図

遺構

牛ノ松遺跡は、調査区のほぼ中央を南北に走る谷地形により東西に分けられる。今回の調査では、緩斜面性の堆積である黄褐色砂・シルトを基盤とした地域である東側で多くの遺構が検出されており、それより古い時期と考えられる赤色土壌を基盤とした地域の谷の西側（92D区）や東側の東端では遺構の密度が希薄となっている。また、幅約20mで、中世の遺物包含層を除いた谷底面と遺構検出面の比高差が約2～2.5mを測る谷地形は、中世層までは掘削可能であったが、その下層にある尖頭器や石鏃が出土する礫混じりの砂層については、礫や湧水のため全面にわたって調査することができなかった。

旧石器時代～縄文時代

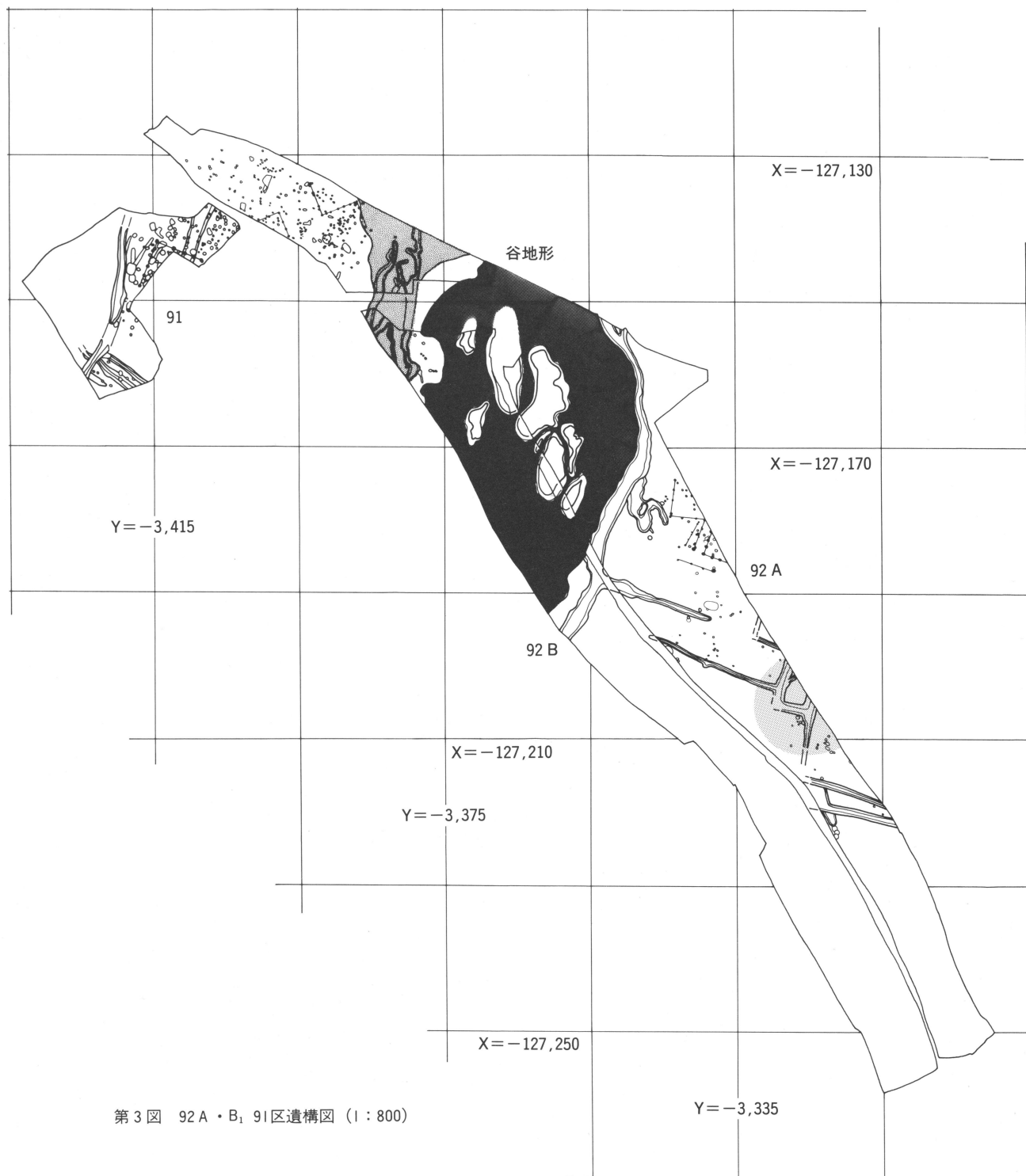
92A区の南東部において、中世の遺構検出面である黄褐色砂層の上層（下層に比べやや暗い土色を呈する一暗黄褐色砂層）より石鏃・細石核・剥片などが106点出土した。この暗黄褐色砂層は、谷の方向である北・西にむかってゆるやかに下っており、東・南側は後世の削平を受けている。石器群もこの傾斜に沿うように北・西にいくほど低い地点より出土している（第4図）。またこの底地部分に堆積した暗茶褐色シルト層からも石器群が出土したが、点数は少なく、高位地域よりの流れ込みであると考えられた。さらに、一部の石器は谷地形から出土している。これらの石器群については、篩による選別でも数点の微小剥片しか出土しなかったことや、礫群などがみられないこと、出土位置が傾斜していることなどから、居住場所や石器製作場所として認めることは難しいものと思われる。

中世（鎌倉時代～室町時代）

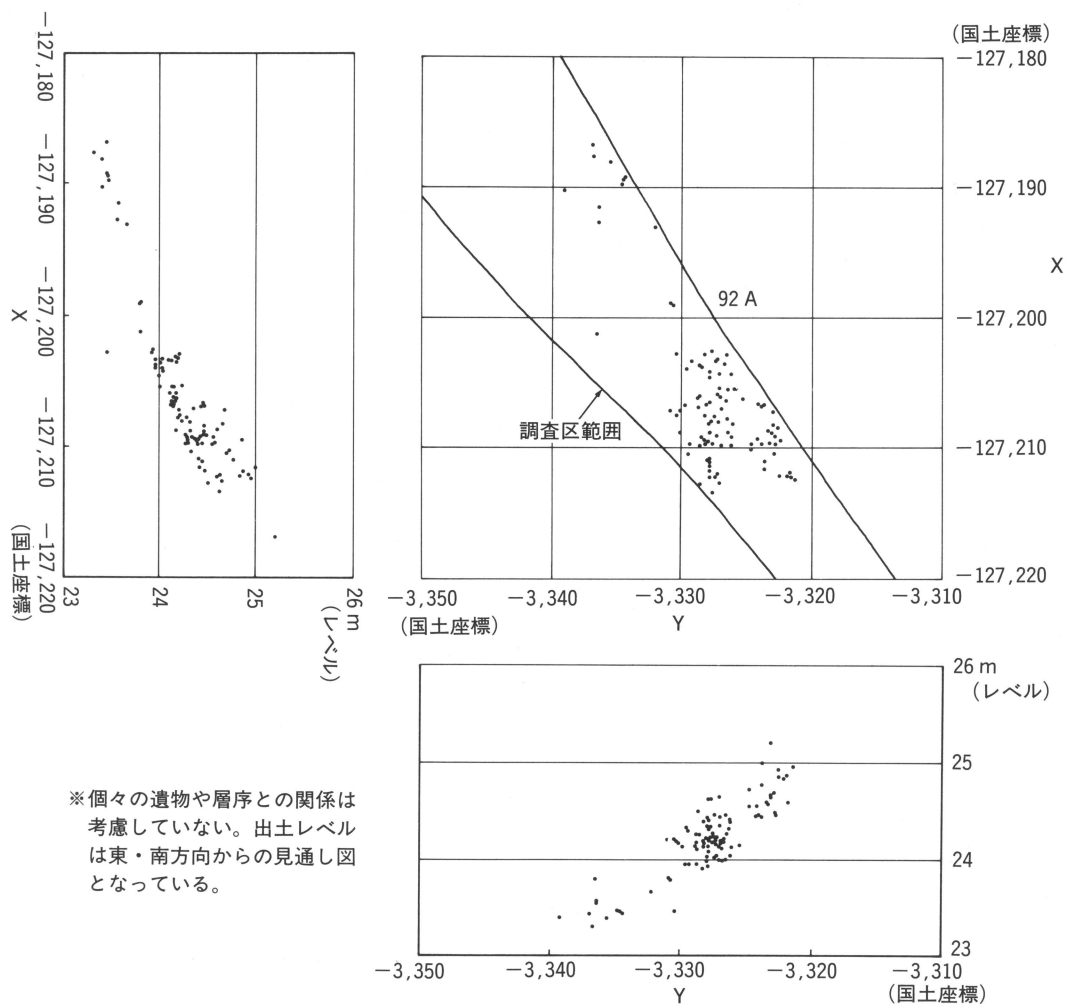
中世は居住域となる。この時期の谷地形には明らかに水流がみられるが、谷全幅にわたるような大きな流れではなく、中洲状になった砂の高まりがいくつもあり、その間を小水流が流れるといった状態であったことが想定される。さらに西側には、数条の不定形な溝を伴い、本流と平行して走る浅い谷地形もみられる。

谷地形の東側では、谷の肩に沿って走る幅2～3m・深さ0.5～1mの溝（92A区SD20・92B区SD06）と、そこから分岐して谷地形に直交して直線的に延びる溝があり、この直線の溝を基準とした溝で区切られた方形の区画が2ヶ所みられる。溝は2～5mの間隔をもって2条が平行して走っており、谷地形に近い区画の南側では、内外の溝を異なる地点で途切れさせ、鍵状の出入口を設けている。また、この区画内では掘立柱建物が検出されている。谷地形に沿って走る溝からは、灰釉系陶器の碗・皿や土師質の皿、宋三彩片など多量の遺物の出土があった。時期は13世紀後半～14世紀前半となろう。

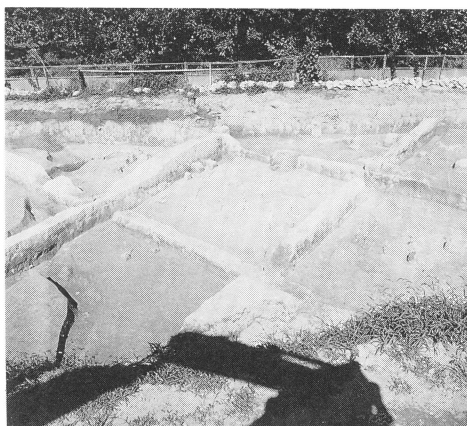
同じく谷地形の東側で、楕円形の土坑の長辺にあたる壁際から、灰釉系陶器の碗と鉄製の刀子、その反対側の壁際に皿をもつ12世紀後半～13世紀前半の土壌墓も検出されている。



第3図 92A・B、91区遺構図 (1:800)



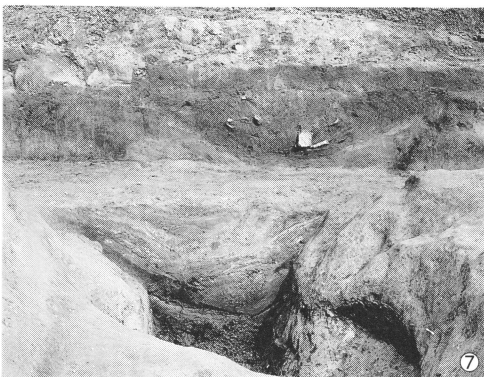
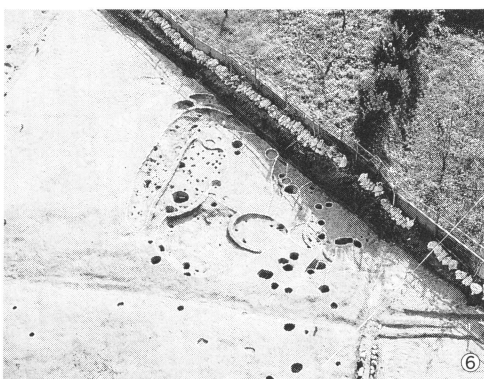
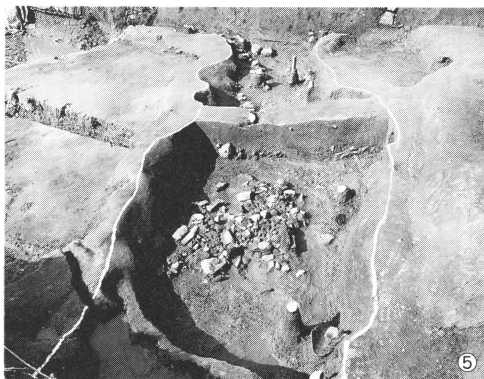
第4図 石器群出土分布



92 A 区 石器群出土状態
(ピンボールが出土地点)



92 B 区 谷地形より出土した尖頭器
(ピンボールが出土地点)



1. 92 A 区
北東部（北西より）
2. 92 B 区
北東部（北西より）
3. 92 D 区
北東部（北より）
4. 92 A 区
土墳墓（SK 16）
5. 92 B 区
SD 06 土器出土状態
6. 92 D 区
SD 35
7. 92 D 区
南東部（北壁セクション）
（谷地形と SX 01）

谷地形の西側では、東側にあるような谷地形に沿って走る溝はみられなかった。ただ、昨年度の調査区において東側の区画溝と同様に谷に平行する溝とそれに直交する溝が検出されており、そこを区画の南西端とすると、東側のものとはほぼ同じ規模となる。また、区画内には掘立柱建物や柵列がある。

遺物

旧石器時代～縄文時代

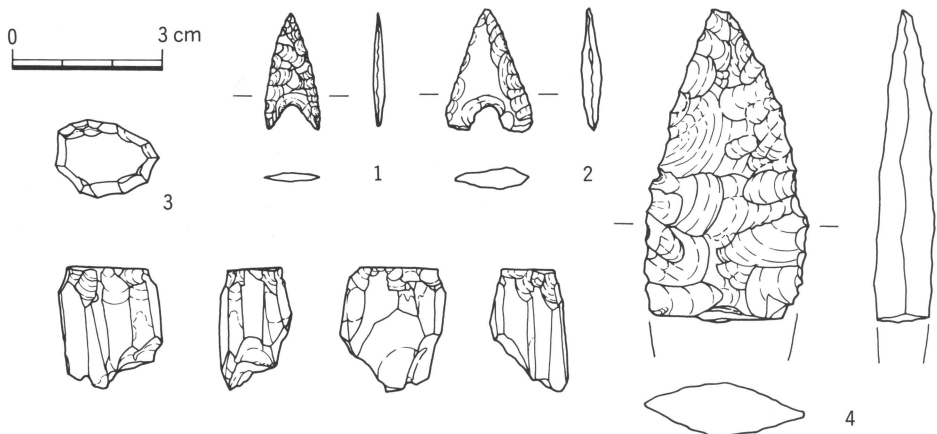
十分な検討は行っていないが、今までのところナイフ形石器文化まで遡るものは出土しておらず、92A区の石器群下層や谷地形で見つかっている細石核や尖頭器が最も古く、細石刃文化～縄文時代草創期に属するものと考えられる。また、第5図の石鏃は鋏形鏃に分類される縄文時代早期のもので、その他の石鏃もおそらく縄文時代のもと思われるが、同時代の土器は出土していない。

中世（鎌倉時代～室町時代）

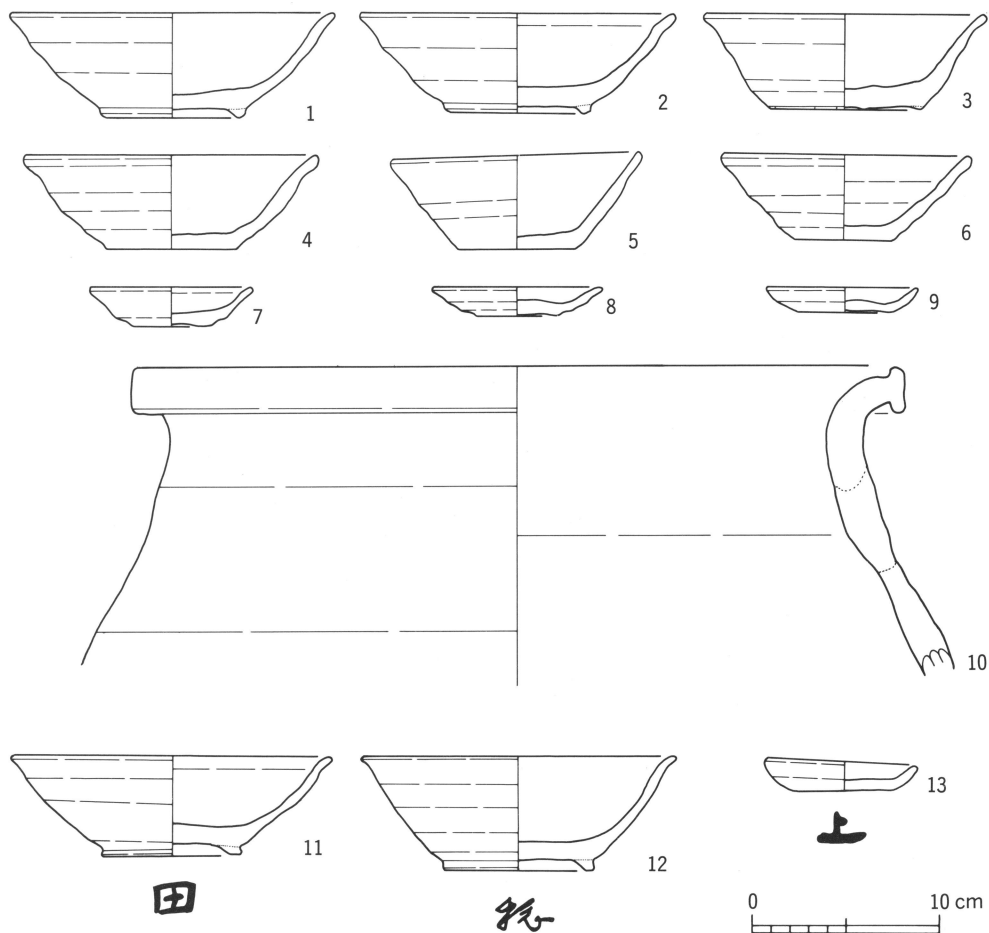
鎌倉～室町時代を中心とした当該期の遺物には、灰釉系陶器の椀・皿、土師皿、常滑産の鉢・甕等に加えて、中国龍泉窯産と思われる青磁・白磁がある。中でも「宋三彩牡丹文洗」と呼ばれる中国産陶器は、戦国時代尾張守護所であった稲沢市下津城跡について愛知県下2例目のものである。各部の破片が9点出土しており、外面に緑釉、内面に緑釉・黄褐色釉・ヘラによる沈線が施されている。

これらの遺物の多くは集落を取り囲むと考えられる溝（92A区S D20・92B区06）から出土している。その時期は13世紀後半から14世紀前半を中心とする。

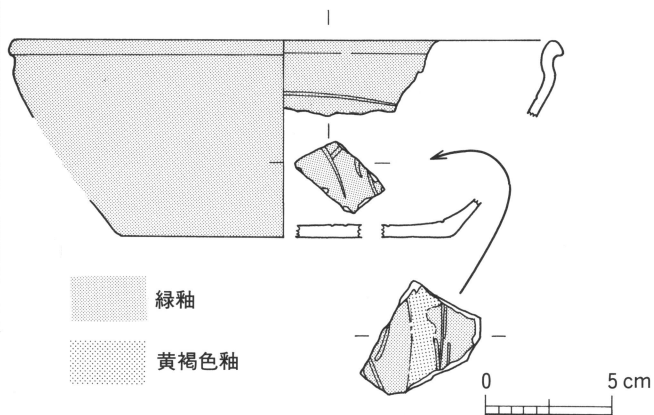
また溝出土の遺物群より約1世紀古い一群の遺物が谷地形の埋土中から出土している。これらの遺物の内、灰釉系陶器の椀・皿の底部には「田」・「稔」・「上」と記されている墨書陶器も含まれている。



第5図 出土石器

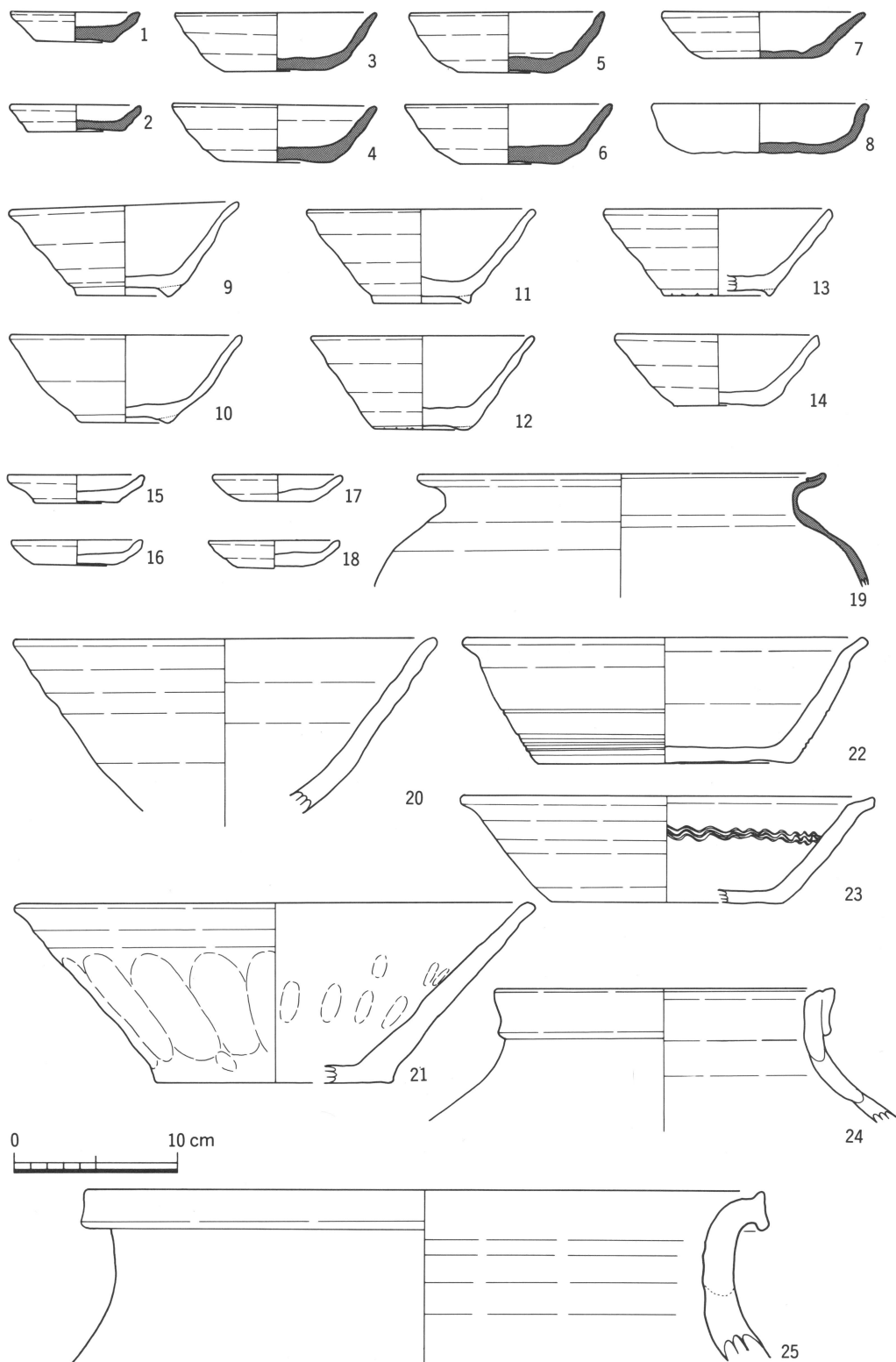


第6図 出土土器 1～10 S D 06、11～13 谷地形
(10のみ1/6)



第7図 宋三彩洗 (径・高は推定)

◀ SD20土器出土状態



第8図 出土土器 1～25 92A SD20

まとめ

1. 旧石器時代～縄文時代にかけての明らかな遺構は検出されなかったが、当該期に属すると思われる石器群が確認された。これらの石器群は谷地形にむかって低くなっていく、ゆるやかな斜面に堆積した二次堆積物の可能性が高い。ただそのまとまりからみると、近くに石器製作場所か居住場所があり、そこから運ばれたものと考えた方がよいようである。今後、各々の石器の分析や分布状況、土層堆積との対比などを詳細に検討しなければならないであろう。
2. 今回の調査で確認された鎌倉時代～室町時代の中世遺構のうち、溝については大きく2つの種類に区別する事が可能と考えられる。一つは92A区において検出された屋敷地を区画する溝である。これに対するいま一つの溝は、92A・B区において確認された谷地形に沿う様に掘削され、集落を囲い込む役割を持っていると思われる溝である。この溝は92C区でも検出されており、その掘削が谷地形のどの位置から始まっているのか、どのように収束していくのかが、注目される。
3. 中世の牛ノ松遺跡では、谷地形を挟んで東集落と西集落の2つの集落が立地していたことが判明している。このうち先に述べた集落を囲い込むと考えられる溝は、東集落のみに存在し、西集落では確認されなかった。これに対し西集落では溝の代わりに谷地形に沿う様に柵列が構築されていた可能性がある。この集落の構造に関する差はいかなる事に起因するのであろうか。今後の課題である。

(宮腰健司・川井啓介)



△92A区SD20と谷地形
◁92A区区画溝の途切部